

とよとみききんぱくおしりゆうめんしやちがわら

豊臣期金箔押龍面鯨瓦（室町～江戸時代）

〔所有者〕大阪市（教育委員会事務局）  
〔出土地〕中央区法円坂  
〔分野〕有形文化財  
〔部門〕考古資料

特別史跡大坂城跡の南西に位置する独立行政法人国立病院機構大阪医療センター敷地内で実施された発掘調査で出土した、龍の顔面を表した鯨瓦である。昭和52年(1977)と平成3年(1993)に実施した2回の発掘調査で出土した破片が接合した。後者が大坂夏ノ陣後に埋没した溝から出土したことにより、豊臣期のものと確認できる。大坂城跡では多くの金箔



押瓦が出土するが、そのなかでもこの鯨瓦の迫力豊かな龍面の造形は優れた技術によるものであり、全国の城郭遺跡出土例と比べても貴重な考古資料である。

とよとみききんぱくおしきりもんほうけいかざりがわら

豊臣期金箔押桐文方形飾瓦（室町～江戸時代）

〔所有者〕大阪市（経済戦略局）  
〔出土地〕中央区森ノ宮中央  
〔所在地〕中央区大手前（大阪歴史博物館）  
〔分野〕有形文化財  
〔部門〕考古資料

方形板状の瓦の表面に五七桐文を表した金箔押飾瓦である。昭和46年(1971)に行われた大阪市立労働会館の改築工事に伴う発掘調査において出土した。縦18cm、横19cmで、幅1.0～1.5cmの周縁の内側に桐文を配置し、その間の平坦な部分に4箇所の釘孔がある。1箇所の欠損もなく完形で、金箔の残り具合も大阪市内の出土資料ではもっとも良い。桐文は、菊文とともに天皇から豊臣秀吉に下賜された。その後、秀吉は他の大名がこれらの文を使用するのを制限する一方で、主として秀吉恩顧の大名に下賜した結果、大坂城下だけでなく全国の諸城郭で桐文の瓦は用いられた。軒丸瓦や軒平瓦も多く、そのなかには金箔押瓦も含まれるが、本資料は出土例の少ない方形の飾瓦であり、全形や金箔の状態からも同文瓦の代表例として挙げる事ができる。



とよとみききんぱくおしきくもんだいかざりがわら

豊臣期金箔押菊文大飾瓦（室町～江戸時代）

〔所有者〕大阪市（経済戦略局）  
〔出土地〕中央区大手前  
〔所在地〕中央区大阪城（大阪城天守閣）  
〔分野〕有形文化財  
〔部門〕考古資料

直径45cmと巨大な菊文の飾瓦である。昭和29年(1954)の大阪合同庁舎第1号館の基礎工事中に採集され、大阪城天守閣が保管したことがきっかけで同館の所蔵資料となった。円形板状の瓦の表面いっばいに12葉の重菊文を表している。花卉の合間に9箇所の釘孔がある。一部にわずかな欠損があるがほぼ完形であり、金箔も広い範囲で残存している。数箇所に<sup>はんきず</sup>范傷が認められ、京都市伏見城跡で採集された金箔のない大飾瓦（大阪城天守閣寄託資料）と同<sup>どうはん</sup>范である。裏面には断面円形の粘土棒を半環状に取り付けた把手がある。釘孔の



左右対称方向とは一致しない。菊文も桐文とともに天皇から秀吉に下賜され、豊臣氏と関わりの深い文様である。また、同じく秀吉によって築造された伏見城の瓦に、本資料と同范のものが含まれることは注目される。

とよとみききんぱくおしおもだかもんほうけいかざりがわら

豊臣期金箔押沢瀉文方形飾瓦（室町～江戸時代）

〔所有者〕大阪市（教育委員会事務局）  
〔出土地〕中央区大手前  
〔分野〕有形文化財  
〔部門〕考古資料

方形板状の瓦の表面に<sup>おもだかもん</sup>沢瀉文を表した金箔押飾瓦である。昭和62～63年(1987～88)に、現在、大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館のある敷地で行われた発掘調査で出土した。縦・横とも28.5cmで、周縁のない形状である。3箇所の隅を欠いて金箔はほとんど剥落しているが、沢瀉文の下地に塗られた朱漆の色彩は鮮やかである。現状では3箇所に釘孔が認められ、本来は4箇所にあったと復元できる。沢瀉文の飾瓦・鬼瓦は、上記敷地内でも特に南北約240m、東西約120mの広さを持ち、上町筋に面した大名屋敷と考えられる区画から集<sup>うまじるし</sup>中して出土した。同文は豊臣秀次の馬標に見られ、木下氏や秀吉の従兄弟とされる福島正則などが家紋として用いたことや、この大名屋敷が豊臣氏大坂城期前半に存在した後、大規模な改変を受けているという調査結果から、この屋敷の主を秀次と結び付ける見解がある。



けいしんびくにそせいたんかんけいしりょう

### 慶心比丘尼蘇生譚関係史料（江戸時代）

〔所有者〕宗教法人 長宝寺

〔所在地〕平野区平野本町3丁目

〔分野〕有形民俗文化財

長宝寺は閻魔信仰が盛んなことで知られているが、中世にはすでに厚い信仰の拠点となっていた。長宝寺の慶心という

比丘尼が頓死し、閻魔王のとりはからいにより3日で蘇生、  
逆修供養の必要を人々に説いた。後に慶心が読経中に、光る

青蜘蛛があらわれるという奇瑞があった、という慶心比丘尼蘇生譚を記した、永正10年（1513）の年紀を持つ『よみがへりの草紙』や、元文2年（1737）に制作された絵巻物『長宝寺縁起』などの史料を伝えている。中世から現在に至るまで続く、広く厚い長宝寺の閻魔信仰を物語る史料となっている。

（画像は「紙本彩色長宝寺縁起」）



しょうまんいん あいぜん

### 勝鬘院の愛染まつり

〔保持団体〕宗教法人 勝鬘院

〔所在地〕天王寺区夕陽丘町

〔分野〕無形民俗文化財

旧暦6月1日、現在は6月30日から7月2日にかけて行われる愛染まつりは、大阪の夏祭りのさきがけである。本尊である愛染明王の縁日に行われる法会であるが、寺伝ではなごしのほらえ

夏越祓の神仏習合の神事として位置付けられている。井原西鶴や近松門左衛門の作品にも愛染まつりの情景が描かれており、江戸時代前期から継続して行われてきた祭礼と考えられる。大阪市中の新地の芸者衆が駕籠を仕立てて行列し参拝する風習である宝恵駕籠行列は、文献史料的には十日戎よりも先行する。



ちようほうじ えんましんこうしゅうぞく

### 長宝寺の閻魔信仰習俗

〔保持団体〕宗教法人 長宝寺

〔所在地〕平野区平野本町3丁目

〔分野〕無形民俗文化財

永正10年（1513）の年紀を持つ『よみがへりの草紙』で記される、慶心比丘尼の蘇生譚の舞台となる長宝寺は、中世から現在に至るまで広く信仰を集める閻魔信仰の拠点となっている。毎年5月18日に行われる閻魔王の縁日では、『よみがへりの草紙』に記されている習俗である、参拝者の額に閻魔

王の花押を彫りこんだ宝印を授与すること、閻魔王の奇瑞で出現した青蜘蛛の舍利を公開し、結縁することが行われている。閻魔王の宝印授与は全国的に見ても珍しい。中世の信仰習俗が現代まで継続して行われているという、大阪市内に残る特別な閻魔信仰である。

